無心〜むごころ〜

友月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無心～むごころ～

【Ｎコード】
Ｎ７５８３Ｃ

【作者名】
友月

【あらすじ】
何気ない中学校生活。出会い、よろこび、そして別れ。あなたは何が、あなたの人生で大切だと思いますか？ある少女の、そんな事を考えてしまう、物語。

第1話　「常心～つねごころ～」

何気ない毎日が続いていた。
いじめられているわけでもないし、悩んでいるわけでもない。
友達はそこそこいるし、勉強だって、運動だってそこそこできるし。
でも、なんでかな？

最近、自分に全然自信が持てないんだ。

季節は春。出会いの季節！恋の季節！春は楽しみがいっぱいで、わくわくしてる。好きな人とかできたらいいな。
なァんて思っていたのは小学生の頃まで。私は今中学校2年生。しかも学校は女子校。出会い何てあるわけない。
「おはよう。」
「あ、おはよう。」
毎日交わすこの挨拶さえもう面倒くさくなってる。まだ中1の頃は元気に言ってたはずなのに。

私の学校は、お嬢学校と言われているキリスト教学校で、都内にある中高一貫校だ。幼稚舎からある学校で、小学部、中等部、高等部、そして大学、大学院と構成されている大きな学校だ。
苦労してこの中学校に受かったときは、それはそれは喜んだことを覚えている。でも、さすがに中2になると、その喜びも心ないしか薄れていく。

最初のベルが鳴ると共にみんな席に着くかと思いきや、周りはまだわいわいがやがや。中1の頃の静けさはもう跡形もない。そんなとき、担任が教室に入ってきて挨拶をする。

「・・・後輩達の良いお手本になるように・・・」
長い話だなァ。。。後輩達の良いお手本？冗談じゃない。悪いお手本になってやる。そんなことを思っている時点でもう良いお手本にはなれないと思った。

担任が話を終えて、またベルが鳴った。みんな移動を開始する。これから講堂へ行って礼拝して、校長の長い話でも聞くのだろう。

長々と続いた校長の話はみんなの眠気を呼び戻す。1人。。2人。。。熟睡していく子が目に映る。私も寝ようかな。。。そんなことを考えていた。
「友月！」
ビクッ
声をかけたのは隣にいたリンだった。
「寝るな寝るな。」
「ええ。。眠いのに。。」
リンは根が真面目で、寝かせてくれないから厄介なんだよね～。そんなこと思ってたら、校長の話が終ってしまった。

教室に帰ると、1時間目のチャイムがすぐ鳴った。
「ヤバ！次移動教室6階ジャン！」
「友月もう行くよ！」
「待って待って！！」
数人の友達に声をかけられて、急いで6階の音楽室へと向かった。
今日の1時間目が音楽ってコトをすっかり忘れていた。

教室に着くと、号令と共にみんなが席に着いていた。私たちも息を荒くしながらも、
あわてて席に着いた。
「何やってんだか。」

「はは、1時間目音楽ってコト忘れてた。」
音楽室で隣の席なのはユカ。私が遅れてきたことを笑っている。
「はい、じゃあ早速曲配ります。目を通してみて。」
先生がプリントを配り始めた。教室はさすがに最初の授業だから静かだ。
「この曲は7月にある歌唱コンクールの曲だから、覚えるように。」
先生が一段と声を張り上げて言った。

7月か。まだ私ここにいるね。

私は胸をなで下ろした。

第1話　「常心～つねごころ～」（後書き）

この小説は、私、作者が本当に経験した事を元にして作りました。
この小説が、私の初めての投稿となります。まだまだ未熟ですが、
これを読んで楽しんで頂けたらいいな、と思います。

第2話　「同心～どうごころ～」

号令がかかって、今日も1日が終わった。1日なんて、早いもんだ。今日の掃除当番は、、、3班と4班。やった、早く帰れる！

と、思ったら今日から放課後、歌唱コンクールの練習だった。みんな行きたくなさそうな顔しながらも、おのおの練習へ向かっている。何人かは、行きたくな～ァい、なんて言いながら帰ってしまっている。私は友達が練習に行くというので、まあ仕方なく付いていった。

教室で待っていたのはたった数人のクラスメート達。まだ練習は開始しないみたいで、みんなもう帰っちゃおうか～ァ、と言っている。私も内心帰りたかった。けど、、、

やるなら、やるならちゃんとやりたいな。なんて思った。

結局数人で練習を始めて、終ったのは5時をちょっとすぎた時だった。

「結局数人しか来なかったね～ぇ。他のヤツはなにやってんだか。」

「ホント。練習出てる方がなんかバカみたい。」

私もそれにはちょっと同感だった。同クラスのサキとメグミがおもいっきし愚痴っているのを、私は笑いながら聞いていた。

「ってかそこまで熱くなんなくてもよくね？？」

「だよねだよね。今から練習とかまぢどんだけだし。」

私も二人に混じって愚痴をこぼした。

家に着いてケータイを取り出すと、歌唱コンクールのリーダー、アキからメールが入っていた。

「ユヅキ～～ィ！今日は最初の練習来てくれてありがとうゥ！誰も来ないかと思ったから、まぢ助かったァ～笑））これからもがんばろォ。」

メールを見終えて、アキも頑張っていることを知った。面倒くさいなんて思ったら、アキに失礼なのかな？とも思った。アキだって、アキだって頑張ってるんだから。

次の日教室に入ると、大きなＣＤプレイヤーが置いてあって、キーボードまで設置されていた。準備、早っっ。

その時。

「ドア締めて！！！早く！！！！」

怒鳴られている感じで、気分が悪かったが、言われた通りドアを閉めた。

「これが、昨日配られたうちらが歌う曲で、ＣＤ持ってきたから早速聞いてみましょう！」

教室がしーんとした後、みんながやがやし始めた。

「何アレ？「聞いてみましょう！」だって～ぇ。まぢうけるし。」

「ってか他の教室行きたいんで、ドア開けていいですか～～ァ？？」

みんなけらけら笑っている。

曲が流れているのに、聞こうとする人は、やはり数人しかいなかった。

アキの少し悲しそうな顔が、目に焼き付いて、離れなかった。

第3話　「涙心～なみだごころ～」

朝の時間が終わり、みんな次の授業の準備をし始める。
「ユヅキィ～次一緒行こう～。」
また1時間目から移動教室で、私は準備をするのが精一杯だった。
「あ～、ちょっと待って待って！トイレ行ってくる。」

私は教室の目の前にあるトイレに駆け込もうとした。その時。
「アキ？」
アキが鏡の前で、、、泣いていた。
「目、真っ赤だよ？泣いてたの？」
私がそう聞くと、アキは笑ってクビを振った。

チャイムがなり、私は階段を友達数名と駆け上がっていた。
「やばァ～、遅れる～～。」
全然焦ってなさそうに言っているカナに短いつっこみをいれて、
私は教室まで全力疾走した。

その日は練習が1回もなくて、掃除のなかった私はサキと帰ることにした。
「ってかね、アキが泣いてたの。トイレで。」
「ええ！アキが泣くの！見たことないな～。」

サキはアキと一緒に小学部から上がってきた子達だ。二人はそこまで深い
関係でわなかったみたいだが、お互い知っていた。

「よっぽどショックだったんじゃない？朝のやつ。」
「うん、みんなもちょっとひどすぎたかもね。」

そんなことを言って、帰りの道を歩いた。

家に着いた私は、いつものようにケータイを取り出した。

メールが2通。

1つ目はサキだった。

「今帰ったよォ～夏休み、遊びいこ～ね！んじゃァ！」

2つ目はアキからだった。

「今日、ごめんね。ドア閉めろみたいな、強い口調で。。。でも、これからもガンバロォ～　それじゃあね。」

アキのメールを見た後、私はすぐにメールを返信した。

「アキ、そこまで思い詰めなくてイイと思うよ。それに今日の朝のことは気にしてないから！
だから、頑張ろうね！」
そう返信して、ケータイを閉じた。

サキのメールには、なんとも返事を書けなかった。
だって。

夏休み、もう、私はここにいないから。

第４話　「思心～しごころ～」

私がそれを知ったのは、もうだいぶ昔のことだった。

「中２の夏に、ここを離れなきゃならない。」

別にそこまでの衝撃はなかった。

ただ、今までと違うのは、、、

歌唱コンクールが、もうすぐそこまで近づいてきた。他のクラスも練習時間をどんどん増やしていて、そろそろリハーサルも始まった。

そんなときだった。

練習時間は日に日に増えているのに、練習に出る人数は相変わらずだった。

「今日の練習は３階だから！みんな来てね！」

アキがそう叫んでいた。

いつものように３時３０分過ぎから始まった練習には、最初の頃よりは少し多くなった人数が集まっていた。

「今日もあんま集まってないね。。。」

アキがそう言った。

練習が終わって家に帰ると、いつものようにアキからメールが入っていた。

「コンクールまであと1週間！練習出てくれてありがとう！本番も、この調子で頑張っていこうね♪」
多分練習に出ていたみんなに送ったのだろう。
練習出てなかった人にはなんて送ったんだろう。。。
部活忙しいのに、コンクールの練習出てって言って、ごめんね。
とか言ったのかな？
それから、1週間。歌唱コンクール当日になってしまった。
「友月！直前練習、うちらは4階だって～ぇ。」
直前練習とは、各クラスが与えられた練習教室で本番直前に練習することだ。
うちのクラスも、4階の教室で練習を始める。
「みんな、ちょっと聞いて。今日まで練習してきたのは、優勝する為じゃなくて、みんなで呼吸を合わせて、楽しむためだよ。だから、今までのことは忘れて、今日を楽しみましょう！そして、、、」
アキがどもりながらこっちを見る。
「夏休み明けたら、友月は、、、海外に転校してしまいます。だから、友月を楽しませてあげよう！」
みんながこっちを見ながら驚愕の顔を浮かべている。
ばれちゃった。。。

第5話　「気心～きごころ～」

さあ、最後の練習だ。

私たちの出番は、もうすぐそこだった。緊張と共に聞こえるみんなの鼓動。なのになぜかみんな、まっすぐ前を見つめている。

リハーサルの時、アキがみんなに言ったのは私のことだった。

「友月は、転校してしまいます。」

まだ、本当に数人にしかその事を伝えてなくて、クラスのみんながどよめいた。

「え！？・・・うっそ。」

「ご、ごめん。言うの、タイミング分かんなくて。」

伝えようと思ったけど、伝え方が分からなくて、

結局アキからばらされてしまった。

「だから、今日は楽しもう！順位とか、そんなの、関係ないって。」

アキが真面目に言った。

みんなも真面目にアキを見る。

さあ、本番だ。

ステージに上がる前、各クラスの名前が放送される。

その放送が入ったら、息を合わせて一緒に立つ。

「2年2組。」

あ、来た。

すっ

緊張のあまり、みんなかちこちしてる。でも、なんだろ？みんなすごい集中してる。

ステージに立つと、他の学年がよーく見れる。

中1の時もやったはずなのに。慣れないな、この緊張。

伴奏が始まった。

よっし。やってやる。

ここまでくると、練習したしてないなんて、どうでもよくなる。

結局やる気の問題ジャン？？

始まってしまえばすぐだった。

みんなの拍手が聞こえて、終わった感が一気に上がった。

ステージから降りるときは、もう、笑顔を消すのが精一杯。

こみあがる感動。やってやったぞ！みたいな。

できはそこそこ。練習していた人と、していなかった人の差は少し開いたけど、、、

まあ、いっか。

もう、笑顔しか出てこない。

第6話　「祈心～きごころ～」

うちのクラスが終わって、その後3クラスを聞いて
お昼になった。

「ゆ～づ～～きっ！お疲れぇ～！」

声をかけてきたのは、、、違うクラスのノンだ。

「そっちもお疲れ～ぇ、一緒食べよう！」

お弁当は、ノンと同じクラスの5人で食べることになった。

「2組めっちゃよかったよォ。うちのクラスダメダメだ。。」

ノンが笑いながら言った。

「うっそだ～、うちのクラスめっちゃバラバラだったし。」

私は大きくのけぞりながら言った。

やっぱり練習不足のせいなのかな。今になって、そんなこと思った。

お昼時間は４０分間だった。時間が余った私たちは各々遊び始めた。

「友月～夏休みどこ行く？」

ノンが聞いてきた。

ノンは私が転校することを1年くらい前に知っていた。
私が唯一教えた相手だった。
「7月中に遊園地でも行こう～。」
そう言って、ノンは教室に戻っていった。
私も自分の教室に戻って、校内放送を待った。
「でもま、努力賞とれたら嬉しいって感じ。」
私は友達とそう言っていた。
確かに、そこまで練習してないんだから、仕方ないと思っていた。
それから10分ほどして、講堂に戻った。3年生の曲を聞いた後、
結果発表を待った。
3年生の曲は、1年、2年とは比べ物にならないくらいすごい。
やっぱり、3年生で最後の歌唱コンクールだからかな～。
講堂が暗くなった。
「優秀賞！3年4組！」
祈りたくなってきた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7583c/

無心〜むごころ〜

2010年12月29日17時30分発行